[書評]

Ivan Klajn
GRAMATIKA SRPSKOG JEZIKA

Beograd: Zavod za ud benike i nastavna sredstva, 2005. 263 pp.

野 町 素 己

同じような表題の本でも，書かれた時代により，あるいは書かれた目的により，内容や性質がそれぞれ全く違うことは珍しくない。とくに文法書の場合は本の表題は同じようなものになりがちであるが，内容は一様にはなりえない。文法という言葉には，さまざまな可能性が含まれているからである。

ここで紹介するセルビア語文法も例外ではない。「セルビア（クロアチア）語文法」あるいは「セルビア（クロアチア）語」という表題の本は数多くある。例えば，ドイツ青年文法学派の August Leskien による古典的な Grammatik der serbo-kroatischen Sprache (Heidelberg, 1914) は，当時隆盛であった歴史・比較文法の立場で書かれているので，当該言語の方言の用例，そして古代教会スラヴ語との比較が記述の多くを占めている。一方，Михаило Стевановић 著の Савремени српскохрватски језик I, II (Београд, 1986[5]) は，セルビア人を対象にした現代語の規範文法である。また，ブルガリアの有名なスラヴィストである Лили Лашкова によって書かれた Сърбо-хърватска граматика (София, 2005[2]) では，現代セルビア語の文法構造が記述されているが，非常にしばしば現代ブルガリア語と対照されているので，広い意味で対照文法の性質を持っていると言える。さらに Живојин Станојчић 及び Љубомир Поповић の Граматика српског језика は，セルビア人学生に向けられた教科書であり，セルビア語の記述および文語のノルマという点から書かれている，いわゆる「学校文法」である。

本稿で取り上げる Ivan Klajn の Gramatika srpskog jezika は，上に述べた文法書とは違い，「外国語としてのセルビア語」という視点に立って書かれている文法の教科書である。その目的は，著者の言葉を引用するならば，「全ての必要な文法事項を簡潔に，しかし余すところなくまとめ，それを有機的な形式で読者に提示すること」である。とはいえ，これは会話の練習や練習問題が付いているセルビア語の実用的運用能力を高めるための典型的な「外国人向けの教科書」ではない。普通のセルビア語の教科書ではあまり述べられることがない文法事項（例えば指示代名詞の対立の問題，語順の問題，イディオム的な言い方についてなど）も記述されており，セルビア人をも含めた万人向けの文法書と考えてよ

いだろう。

まず著者について少し述べておく。Ivan Klajn は，セルビア科学芸術アカデミー正会員の言語学者で，セルビア語標準化委員会の委員長である。そして実質的なアカデミー文法の形態論の一部をなす Творба речи у савременом српском језику I, II (Београд, 2002-3) の著者でもあり，また長年にわたってセルビア語の正しい使用に関する記事や論文を多数発表し，中でも版を重ねる Речник језичких недоумица (Београд, 2005[7]), あるいは Павле Ивић, Митар Пешикан, Бранислав Брборић との共著 Српски језички приручник (Београд, 2004[2]) が名高い。

では，本書の内容に移ろう。本書は大きな五つの章からなっている。最初に現代セルビアの言語状況，その方言，文字についての簡潔な紹介があり(13-18)，その後に本書の中核をなす②音声論(19-41)，③形態論(44-174)，④語形成論(176-220)，⑤統語論(222-263)が続いている。各セクションの余白には，該当事項のキーワードや例が書かれていて，探している項目を見つけやすくしてあるのが特徴的である。

まず，セルビア語の言語の状況と方言についてだが，ここではごく基本的な情報，すなわちセルビア語はシト方言が文語の基盤になり，エ方言およびイェ方言が標準語として認められていること，そのうちエ方言が有力であることが指摘されている。著者は，純粋な言語学的立場から見た場合，セルビア語とクロアチア語，そしてボスニアおよびモンテネグロの言語は，一つの言語のバリアントであるという立場を取っている。文字に関して言えば，セルビア語ではキリル文字が基本となっているが，ラテン文字の使用範囲が広がっていることが指摘されている。尚，著者も書いているように，セルビアではラテン文字の急速な普及からキリル文字の危機が指摘され，キリル文字の伝統を守るための国際シンポジウムが催され，論集や多くの著書が出るほどである。[1]

続いて音声論だが，明快に説明されている。複雑な音の交替などについて必要な情報が網羅され，例えば子音の同化，消失などはそのメカニズムが分かるように説明されている(例：iz + šetati → *issetati → *iššetati → išetati など)。その際，正書法の問題も簡潔に，かつ的確に解説されているが，これはこの問題に長年携わってきた著者ならではの記述であろう。ところで，セルビア語の学習においてセルビア人にも最も難しく，そして外国人なら恐らく最後まで問題として残るのは，上昇下降と長短を組み合わせた 4 種のアクセント，

[1] その一つとして，2005 年 7 月に開催された，セルビアの学識者および同じキリル文字圏のロシアやベラルーシの学者が参加したシンポジウム"Данашњи положај писма српског језика и како (са)чувати ћирилицу у српском народу и његовом језику"「今日のセルビア語の文字の状況，そしてセルビア人とセルビア語のキリル文字をいかに守るか」が指摘できる。そして，そのシンポジウムの後に出版された論集は，さらに問題意識が明白になった"Срби губе своје писмо" (Нови Сад, 2005)「セルビア人は自分の文字を失いつつある」というタイトルで出版された。

そしてアクセント後の長音の有無の問題である。よく知られているように，各アクセントを身につけても，各語におけるアクセントの変化を知らないと，どの単語も正しく発音できないのである。当然，アクセントの質と音の長さによって単語の意味が異なることも生じる。[2] これらは，文脈次第で意味が区別されることがほとんどであるし，外国人ならセルビア語のアクセントをマスターすることはおよそ現実的ではないので，ここでは非常に簡略な説明に留めてある。これは確かに現実的な解決法であろう。実際，アクセントの記述だけでも相当のページ数が必要で，しかも「音が聞こえない」そのページから具体的に何かを身につけることは難しい。しかし，これは他のスラヴ語と比べても，南スラヴ語の一部，特にセルビア語ならではの特徴であり，決して無視できる問題ではないので，ある程度の具体例や更なる参考文献や教材などが挙げてあったらなお良かっただろう。

また，アクセント後の長音に関しては，長音を保持する文語のノルマと，例えばベオグラードで実際に耳にする長音を省略した発音という違いがあることや，前置詞などの後接語へのアクセントの移動の傾向などが説明されている。アクセント後の長音の有無のマスターにも困難が伴うが，一例を挙げるならば，a で終わる名詞の生格，造格の活用語尾の母音が常に長音になることなど，特に困難が伴わない規則がない訳ではない。それでも記述のバランスという点で詳しく書かれていないのは，現実的な妥協であろう。尚，複数生格における長音の語尾に関しては形態論のところで説明されている。

形態論は伝統的な 10 種類の品詞分類（名詞，形容詞，代名詞，数詞，動詞，副詞，前置詞，接続詞，小詞，感嘆詞）の説明から始まり，品詞ごとに記述されている。既に述べた理由から，例えば前出の Стевановић の著書などとは違い，一部名詞やアオリストとインペルフェクトの語尾の類似性がある場合などを除き，アクセントについての記述はあまりない。名詞の活用に関して言えば，その分類は研究者によって意見が分かれるところだが，例えば Стевановић の 4 分類とは異なり，Klajn は大きく 3 種類（中性名詞と子音で終わる男性名詞，a で終わる女性名詞と男性名詞，子音で終わる女性名詞）に分類している。その違いは，主に延長語幹を持つ中性名詞を独立したグループにするかしないかである。形容詞の変化についての記述で注意すべきは，短形変化は一部を除いて消えつつある変化なので，実用性の視点からほとんど省略されていることである。尚，このことに関連して，所有形容詞の変化に関する傾向として，短語尾変化に代わり長語尾変化が圧倒的になっていることが指摘されている。この章で最も重点が置かれているのは，複雑な形態を持つ動詞のカテゴリーである。ここでは形態，およびその具体的な用法がまとめられている。セルビア語文法の伝統では，動詞の用法は「動詞の統語論」として統語論の中で述べられる

[2] 尚，典型的な例は Асим Пецо 著 Основи акцентологије српскохрватског језика (Београд, 1980[2])の Акценти као семантичко-диференцијални знаци (75-77)などを参照されたい。

ことが多いが，Klajn は形態論の中に含めている。[3] これは形式と機能の双方の点から動詞の記述を一箇所にしてあるということで実用的である。

尚，動詞 требати の人称動詞的な使用 (例：требамо да сачекамо) に関して，著者は，教養が低い人の言葉に聞くことがある動詞 требати の変化形をもつ形式は正しい形式ではないと指摘している。[4] 尚，この現象はクロアチア語にもよく知られていて，[5] セルビア語よりも使用範囲が広がっている現象だが，学者によっては人称動詞の一用法として記述していることもある。[6]

前置詞の記述では結合する格の種類の数によって分類されている。これはオーソドックスな分類だが，ここではセルビア語でしばしば見られる前置詞の二重使用については説明されていない。例えば осим за возила са дозволом, осим у понедељак, у око 50 случајева, за по један хлеб などは，実用的な面からみても，記述してあった方が良いであろう。

接続詞に関して言えるのは，例えば，多義的な да の用法，しばしば使用範囲が重なる да と што の関係が簡潔に説明されているところである。この記述は実用的でよい。

語形成論は接頭辞，接尾辞，複合語の合成，品詞転換の 4 項目について記述がされている。Klajn は既に合計 800 ページを超える語形成論を出していて，そこでは純粋なセルビア語の接辞と外国語由来の接辞に分けてアルファベット順に並べ，各々の分析と記述がなされているが，本書では概略的な説明の後に名詞の接頭辞，形容詞の接頭辞など品詞毎に，接辞の意味でまとめてある。著者は必要最低限の情報が含まれることを目指しているのでページ数は限られてしまうのだが，主観的な意味を表す指小形，指大形などは使い方が難しいので，派生する前の形態と派生した形態の違いなど，具体的な使用例をいくつか挙げる必要があるだろう。

尚，著者はノルマの問題と同時に，現代語の傾向という視点も忘れていない。例えば分詞と同じ形をもつ形容詞の接尾-ћи（語幹は動詞）に関して，この接尾が外国語の影響のために広がっているが，その形容詞は一時性の意味をもたないので，分詞とは異なることなどを的確に示している（例：летеће бубе vs. *летећи авион）。

統語論の章ではシンタグマ，単文，複文，語順について述べられている。ここでは特に

---

[3] この伝統は上記の Стевановић の規範文法，Станојчић 及び Поповић の教科書，Милка Ивић 監修の実質的なセルビア語のアカデミー文法である Синтакса савременога српског језика (проста реченица) (Београд, 2005)でも踏襲されている。

[4] 本書の 135 ページを参照されたい。

[5] 例えば，Ivo Pranjkovic の Hrvatska skladnja (Zagreb 2002[2])の 31-35 を参照されたい。

[6] 現在でもクロアチア・セルビア語という表現を用いる数少ないクロアチア語研究者 Snje ana Kordic はその立場を取っている。Rijeci na granici punoznacnosti (Zagreb, 2002)の 175-190 を参照されたい。しかし Kordic はセルビア語のスタンダードではその用法が認められないことを述べていないので，そのために誤解を呼ぶ可能性もある。

理論的な枠組みで統語論を記述しているのではなく，教科書的な記述に留まっている。そしてこの章には，格の意味とその使用に関する記述は無い。形態論の 47-49 ページにそれぞれの格の意味と用法に関する非常に短い解説があるにはあるが，これでは不十分である。統語論の記述の仕方にもよるのだが，実用的な面からも考えても，それぞれの格の具体的用法，そしてそれに関係する類義表現についての簡潔な記述がなされていたら便利である。一例を挙げるならば，Где *ми* je оловка? / Где je *моја* оловка? といった日常生活でもよく聞かれる二つの文は，意味はよく似ているが，使い方は少し異なることが知られている。このような「小さな」違いは母語者には無意識で理解される一方，非母語者には説明と具体例が無いとわかりにくい点である。その他にも，よく使われる動詞の支配に関する意味の違いや可能なバリアント（例えば помоћи＋与格 / помоћи＋対格, лагати＋与格 / лагати＋対格など）が，格の支配に関連し記述されていたら，実用性という面においても，より良かっただろう。

本稿では，内容を簡潔に紹介しながら，本書の優れている点と気にかかった小さな点について述べてきた。大きな視野で本書を見るのであれば，この文法書は普通の人が比較的短期間で読める程の限られたページ数の中で，セルビア語に関する必要な情報を網羅し，しかも明快に解説し，さらに現代語の傾向（よくある間違いなども含めて）をも指摘してあるわけだが，これは簡単な仕事ではない。また必要に応じて，よく学習されている他のメジャーなヨーロッパ語の対応表現を挙げつつ解説するなど，まさに「痒いところに手が届く」と表現できる優れた本であると言えるだろう。この文法書は，自国語の文法に関心を持つセルビア人や実用目的で学習する外国人のセルビア語学習者はもちろんのこと，セルビア語の文法を言語学的に概観したい者，そしてセルビア語の教師にとっても座右の書として薦められる本である。